

説話集編纂者の説話理解 ——猿の生肝の説話を題材として——

本田 義央

1. 猿の生肝の説話

「猿の生肝」あるいは「くらげ骨なし」の名でよく知られている説話がある¹。この説話は、日本各地に昔話として伝承されている²。伝承によって登場者等に多少の相違はあるが、おおよその話の骨格は次のようなものである。亀が、龍王の姫の病気治療に有効といわれる猿の内臓を手に入れるため、岸边から友人の猿をだまして龍宮に連れてくる。猿は、亀の背に乗り龍宮へ到着するが、門番のくらげから事情を聞かされ、岸边に内臓をおいてきたと嘘をついて、亀に岸边へ連れ帰させる。岸边で亀は猿によって仕返しに高所から落とされ甲羅にひびがはいる。猿に事情をもらしたくらげは怒った龍王によって骨を抜かれてしまう。

この説話から我々は何を理解するだろうか。たとえば、人の口に戸はたてられないということわざを思い出させるという解釈も一つには可能であろうし、あるいは口は災いのもと、あるいは沈黙は金なりという理解の仕方もありそうである。あるいは猿の側からみれば、うまく身を守った、ということも一つの話の要となる

¹「説話」を、一義的に定義すること、あるいはその全貌を把握することは難しい。本稿では説話とは何かという問題には立ち入らず、伝承という最低条件をみたすものを説話とする。池上(1991, 35)は「おおよそ説話が説話であるための最も基本的な要件、説話を他と区別する最も大きな特徴は、伝承されることにある。口伝え(口承)であろうと書き伝え(書承)であろうと伝承されるから説話なのであって、伝承されなければ説話とは呼ばない」という。

²関(1950, 229-234)に詳しい。

かもしれない。このお話を聞かされた幼い子供なら、海で見たくらげの姿を思い出して、なるほどそういうことだったのか、と得心するかもしれない。この説話単独では、いろいろな読み方、聞き方が可能である。

ところで、この説話が、インドに起源をもち、漢訳仏典を通して、日本の説話集に取り入れられた説話と並行あるいはそこから派生したものであることはすでに多くのところで指摘されている³。各地につたわる場合には、説話が単独に伝承されるものと思われる。しかし、文献として今日の我々が接する説話は、おおよそ説話集というかたちで複数の説話を収めたもののなかに含まれるのが普通である。この場合、特定の説話が収められる文脈、あるいはその説話の前後につけられる説明的な文章、あるいは説話そのものの内容及び表現によって、説話集編纂者がなにを説話から読み取り、何を説話の重点としてその説話を説話集中に収録したか、ということがわかる場合がある。本稿の目的は、猿の生肝の説話を題材として、同一説話を説話集編纂者がどのように理解していたかを検討し、説話のもつ意味の多様性の一端を示すことで

³代表的なものとして岩本(1978)がある。各説話の異動や伝播のありかた等について論じられている。なお、本稿では類型説話をいずれも「猿の生肝の説話」と呼ぶことにする。ただし、各説話によって登場者や内容に大小の相違があることはいうまでもない。本稿で取り上げる説話集中の説話には、龍宮関連の事柄、すなわち龍王・姫・くらげは登場せず、亀の甲羅のひびについての言及もない。これらは日本での付加的要素かと思われる。また、説話によって、亀が、鱈あるいは鱈、虬と交替する。

ある。

2. 『ジャータカ』

ブッダの前生物語集である『ジャータカ』(Jātaka)では、57「猿王前生物語」(Vānarinda-jātaka)、208「鰐前生物語」(Suṃsumārajātaka)、224「鰐前生物語」(Kumbhīrajātaka)、342「猿前生物語」(Vānarajātaka)という四箇所には猿の生肝の説話が収められている。57と224は同じ説話であるから、考察するのは三つの説話ということになる。どの説話においても登場するのは猿と鰐であり、またいずれにおいてもデーヴァダッタによるブッダ殺害計画に関して、前生でも同じことがあった、すなわち、猿はブッダ、鰐はデーヴァダッタ、という物語として語られるものである。

『ジャータカ』57「猿の王前生物語」(および224)は、他の二話とは異なり、猿が岸辺の木に内臓をおいてくるというくだりはなく、ただ、猿がうまく鰐にから逃れる、という話になっている。説話外の箇所では、今生のブッダの言葉として、鰐(前生のデーヴァダッタ)は猿(前生のブッダ)を「おびえさせることさえできなかった⁴」とブッダはいい、また説話内で、猿を待ち受けて自らを岩に擬した鰐を鰐と見抜いた猿について「かれには水の量と岩の大きさがよく分かっていたのだという」⁵とって前生のブッダの賢明さを示し、また、ブッダを敵に打ち勝つための四つの徳を備えたものとして称賛している。これらのことから、『ジャータカ』の編纂者は、この説話をブッダの知の称賛と理解していると考えることができよう。

さて、『ジャータカ』208「鰐前生物語」では、今生のブッダが先の57と同じく前生のデーヴァダッタはブッダを「恐れさせることすらできなかった⁶」とっており、また、猿は鰐に対して「身体は大きい知恵がない⁷」とってお

⁴Jātaka, vol. 1, 278.16: tāsamattam pi pana kātuṃ na kakkhīti. PTS版は'nāsamattam pi'であるが藤田訳(1984, n1)に従い'tāsamattam pi'と読む。

⁵Jātaka, vol. 1, 279.7-8: tassa kira udakappamaṇaṇi ca pāsāṇappamaṇaṇi ca suvavatthāpitam eva.

⁶Jātaka, vol. 2, 158.21: santāsamattam pi pana kātuṃ na sakkhīti.

⁷Jātaka, vol. 2, 160: sarīram eva pana te mahantaṃ,

り、直接編纂者の理解を読み取れる表現ではないが、鰐(前生のデーヴァダッタ)の無知が中心にいられているように読める。

残る『ジャータカ』342では、説話末の詩節において、鰐の愚かさや猿の賢明さをそれぞれとりあげている⁸。ここではその両方に力点が置かれていると考えられるであろう。

3. 『マハーヴァストウ』

『マハーヴァストウ』では、伝中中の降魔に該当する箇所の挿話として猿の生肝の説話が収められている。ここでは鰐は邪悪なマーラ、猿はブッダである。該当説話末の連結部分の最後にブッダは「その時も私は彼の手落ち、彼の支配下にありながら、優れた覚知で[彼の]領域から逃れたのであり、今生においても、私は邪悪なマーラの領域から逃れたのである」⁹という『マハーヴァストウ』の文脈では、ブッダが過去に何度もマーラの手落ちながら、優れた覚知(buddhiviśeṣa)、すなわち特別の知によって、そこから逃れたということがいわれていることになる。鰐によって絶体絶命の危機に陥った猿は、特別の知によって、それを脱する、というのがこの説話に編纂者が置く重点ということになるはずである。

4. 『生経』

漢訳仏典にみられる猿の生肝説話として、『生経』巻第一第十「佛説鼈獼猴經」を見ておこう¹⁰。そこでは、鰐のかわりに鼈が登場するが、説話そのものには大きな特徴はない。ただし、注目

paññā pana n' atthīti.

⁸Jātaka, vol. 3, 133-134: (vv. 163-164) yo ca uppatitaṃ atthaṃ na khippam anubujjhati amittavasam anveti, pacchā ca-m-anutappati // yo ca uppatitaṃ atthaṃ khippam eva no-bodhati muccate sattusambādhā, na ca pacchānutappatīti // (松村・松田訳(1988, 137-138)「起こりたる事態をたちまちに、覚ることなく、敵のおちいり行かば、後に悔まん。起こりたる事態をたちまちに、覚りて、敵なる障りを免れなば、後にいたりて悔むなからん。」)

⁹Mahāvastu, vol. 2, 250,10-12: tadāpy ahaṃ etasya hastagato vaśagato buddhiviśeṣeṇa viśayāto atikrānto etarahiṃ pi etasya ahaṃmārasya pāpimato viśayāto atikrānto / 訳は平岡(2001, 454)による。

¹⁰猿の生肝の説話は漢訳仏典ではこの他『仏本行集経』『六度集経』に収められている。更に前者の所伝説話は『法苑珠林』巻五十四に、後者のそれは『経律異相』巻二十三にそれぞれ引かれている。

しておかなければならないのは、猿と鼈が一旦極めて親しい間柄となる点である¹¹。それは、ここに猿の生肝の説話が引かれる文脈が、比丘尼としての道を深く歩みながら、かえって逆にブツダを誇ることとなった暴志比丘尼についての前生物語となっているからである¹²。それをうけて、説話中では、一旦猿と親交を結んだ鼈の裏切りに対して、猿は「天下至愚。無過於卿。何所有肝而挂在樹。共爲親友。寄身託命。而還相圖。欲危我命。從今已往。各自別行。」¹³とすることになる。この場合、ここに猿の生肝の説話を置く『生経』編纂者は、親交を結んだものが裏切る、という点に注目しているはずである。

5. 『パンチャタントラ』

さて、これまでに仏教説話集の猿の生肝の説話を見てきたが、インド正統派の説話集の一つとして、『パンチャタントラ』(Pañcatantra)を取り上げてみよう¹⁴。猿の生肝の説話は、『パンチャタントラ』では、その第四巻「獲得したものの喪失」の主話(粹物語)となっており、そのなかに十六の挿話が入っている。第四巻は「対処しなければならぬことが起こったとき、知恵を失わない者だけが困難を克服する。水中

の猿のように」¹⁵という詩節によって導入される。この詩節から考えると、『パンチャタントラ』の編者は、猿の知恵にこの説話の重点をおいていると考えられる。

6. 『今昔物語集』

さて、次に、日本で受容された猿の生肝の説話をみてみよう。このような猿の生肝の説話の類型が『今昔物語集』に第二十五話として収められていることはよく知られている。

『今昔物語』は、当該説話末に「昔も獣はかく墓無くぞ有ける。人も愚痴なるは此等が如し。かくなむ語り伝えたるとや。」という。このこの『今昔物語集』の猿の生肝の説話では、説話中の鰐の愚かさによって人の愚かさがたとえられていることになる。この一文から目下の説話の意図を考えるとすれば、生きた猿が内臓を取りだして別の場所においているなどということはないことは愚かであればわかるはずだ、人もともすればこの種のおろかさを有しているのだ、心しなければならぬ、というようなことと考えることができよう。

7. 『沙石集』

目下の説話は、鎌倉時代中期に無住が編纂した『沙石集』(巻第五本ノ九)にも収められている。¹⁶説話末には「これは獣までも誑惑の心ある事を、経に出だせり」¹⁷とあり、これは、これは目下の説話が引かれる理由が、先行して収録されている蟻とダニの問答説話について、虫が問答することも有りえただろう、ということを示すことにあるからである。したがって、ここでは、猿の生肝の説話の重点は、動物でも人と同じような気持ちをもつことがある、という点におかれていると考えることができる。

8. まとめ

猿の生肝の説話は、インドに源を発し、仏典を通じて日本にまで伝わった。細部の違いはあ

¹¹『生経』(154.3.76c4-6)「時與一鼈以爲知友。親親相敬初不相忤。鼈數往來。到獼猴所。飲食言談。說正義理。」(赤沼・西尾訳(1930, 22)「時に一つの鼈を以て知友と爲る。親親しみ相ひ敬ひ初より相ひ忤はず。鼈數往來し獼猴の所に至る。飲食し言談り正しき義理を説く。)」

¹²『生経』(154.3.76b21-26)「有此暴志比丘尼者。棄家遠業。而行學道。歸命三寶。佛則爲父。法則爲母。諸比丘衆以爲兄弟。本以道法而爲沙門。遵修道誼。去三毒垢。而反懷惡。謗佛謗尊。輕毀衆僧。」(赤沼・西尾訳(1930, 22)「此の暴志比丘尼なる者有り。家を棄て業を遠けて學道を行ふ。三寶に歸命す。佛は則ち父と爲し法は則ち母と爲し諸の比丘衆は以て兄弟と爲す。本道法を以て沙門と爲り道誼を遵修し、三毒の垢を去り佛・法及び比丘僧に供侍す。一切を愍哀し四等心を行ひ乃ち得度す可し。而して返つて惡を懷き佛を謗り尊を謗り衆僧を輕毀す。)」なお、暴志比丘尼の行いについては『生経』巻第一第九「佛說旃闍摩暴志謗佛經」に記されている。

¹³『生経』(154.3.76c29-77a2) (赤沼・西尾訳(1930, 23)「天下の至愚、卿より過ぐる無し。何ぞ肝有りて掛けて樹に在る所ぞ。共に親友と爲り身を寄せ命を託す。而して還つて相ひ圖り我が命を危くせむと欲す。今從り已往各自別に行まむと。)」

¹⁴『パンチャタントラ』については辻(1973, 157-167)およびそこにあげられる諸論考を参照せよ。

¹⁵Pañcatantra 4.1: samutpanneṣu kāryeṣu buddhir yasya na hīyate / sa eva durgam tarati jalastho vānaro yathā //

¹⁶岩本(1978, 141)によれば、『沙石集』所収の当該説話は、『法苑珠林』にもとづいている。

¹⁷小島訳(2001, 244)「これは、動物までも相手をだます気持ちがあることを、経に示しているのである。」

るにせよ、説話自体の大枠はほぼ同一である。しかし『ジャータカ』や『マハーヴァストウ』および『パンチャタントラ』では編纂者は猿のすぐれた知に、あるいは鱧の愚かさに、あるいははその両者に重点を認めている。しかし『生経』では親交を結んだ者の裏切りという点に説話の重点はある。『今昔物語集』では、猿にだまされる亀の愚かさに人の愚かさを重ねて、そこに重点がおかれている。この点で、猿の知恵に力点がおかれる『ジャータカ』等とは編纂者の視点は逆転しているといえることができる。『沙石集』では動物にも人を惑わせる気持ちがある、ということを示すものとして編纂者は目下の説話を収録している。このように、猿の生肝の説話は、編纂者の注目点によってさまざまな文脈に置かれているのである。これはもとより説話の説話たる所以とみることもできよう。猿の生肝の説話は本稿で取り上げた説話集以外にも引かれ、またインド、中国、日本の範囲にとどまらず広い地域に伝播している。それらを含めた検討は今後の課題としたい。

原典及び参考文献

Jātaka: Fausbøll 1962 を見よ。

Mahāvastu: Senart 1882-1897 を見よ。

Pañcatantra: Büler 1891 を見よ。

『今昔物語集』 池上(2001)を見よ。

『沙石集』 小島(2001)を見よ。

『生経』 大正新修大蔵経 No. 154

Büler, G., ed.

1891 *Pañcatantra IV and V*. Bombay Sanskrit Series 1. Bombay.

Fausbøll, V., ed.

1962 *Jātaka*. 6 vols. Pali Text Society.

Senart, É, ed.

1882-1897 *Le Mahāvastu*. 3 vols. Paris.

赤沼智善・西尾京雄訳

1930 「生経」『國譯一切經 本縁部十一』(大東出版社)所収

池上洵一

1991 「説話の生成と伝承—世間話について—」『説話とはなにか』(説話の講座 1、勉誠社)所収

池上洵一編

- 2001 『今昔物語集 天竺・震旦部』岩波文庫
岩本裕
1978 『仏教説話の源流と展開』(仏教説話研究
第二巻) 開明書院
小島孝之校注・訳
2001 『沙石集』(新編日本古典文学全集 52) 小学館
関敬吾
1950 「日本昔話集成—第一部—」角川書店
田中於菟彌・上村勝彦訳
1980 『パンチャタントラ—五巻の書—』大日本
絵画
辻直四郎
1973 『サンスクリット文学史』岩波全書
平岡聡
2010 『ブッダの大いなる物語—梵文『マハー
ヴァストウ』全訳』上 大蔵出版
藤田宏達
1984 『ジャータカ全集 1』春秋社
松村亘・松田慎也
1988 『ジャータカ全集 4』春秋社

(ほんだよしちか 広島大学 [インド哲学])